

決断するまでにどのくらいの準備をしたかで決まる。 決断できないことはしない

医療法人社団横浜育明会理事長・佐原幹夫氏に聞く(前編)

医療法人の理事長を務めて14年。新しい時代に対応できる医療と介護の姿を、事業という視点から模索してきた佐原幹夫氏。その姿勢は、まさに経営者。言葉の定義、物事の区別をつけて、シンプルにメリハリのある経営論を展開する姿は、論客そのもの。佐原氏に組織のトップ像についてうかがいました。



プロフィール ● さはら みきお
1953年東京都生まれ。94年、医療法人社団育明会(現・医療法人社団横浜育明会)設立。98年、医療法人社団恵明会(現・医療法人社団東京育明会)設立。2002年、介護老人保健施設都筑シニアセンター開設。現在は横浜育明会理事長として手腕を発揮している。

—佐原さんの考える、経営者がすべき仕事とは？

絶対しなければいけないことは、決断すること、判断することですね。

—その決断は何をベースにしているのですか？

まずは決断するまでの準備が大切で、一つひとつの決断はおそらく必然だろうと思うんですね。決断するまでにどのくらいの準備をしたかで決まるんです。で、僕は決断できないことはしないんです。

—しかし、どうしても今、その場で判断しなければならないこともあるのでは？

私の言う決断は、経営判断のこと。トラブル(T)、ミス(M)、苦情(K)、ワケアリ(W)の「TMKW」の対応は経営判断とは別物なのです。「TMKW」は対応や問題解決なので、その場でじっくり聞いて何をしないといけないかを考えます。

—きちんと区別されているんですね。

「TMKW」は委員会を組織して対応しています。「TMKW委員会」は自分を含めた6人のマネージャー職で構成しています。

—経営のコア業務以外の部分は、委員会で潰していった、佐原さん自身は決断をすることに集中できる環境をつくられているんですね。

そうです。私自身は五感を研ぎ澄ますことに集中しています。想像力を働かせて未来を考えていく。ここに合議制は必要ないと思っています。私の方向感覚が正しくなければ、今の座からはいつでも降りますよ(笑)。